

## 千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第4次発掘調査概報

高橋龍三郎・井出浩正・中門亮太・大網信良  
新海達也・根兵皇平・高橋 想・斉藤直幸

### はじめに

かつて印旛沼が大きく拡大し、現在以上に大きな汽水域を形成した頃には、台地上の戸ノ内貝塚の住民達は、ヤマトシジミなどの汽水産貝類や魚類を捕採したことが貝塚資料から窺われる。それがおおよそ縄文後・晩期に相当する事も貝塚の資料から裏付けられている。水域を隔てて指呼の間にある縄文時代後・晩期の遺跡群から、緊密な地域社会が形成された事が推測されている。しかし、それを直接的に証明する事は決して容易ではない。それぞれの遺跡において、竪穴住居を中心とした居住の痕跡が発見され、住民間に相互の関係を示す遺構上、遺物上の社会的表徴が見出されれば、それは地域社会を繋ぐメルクマールとなろう。

2006年の夏期休暇中に実施した、戸ノ内貝塚の第3次発掘調査では、調査の終盤に竪穴住居の輪郭を確認した。それを受けて2007年度の第4次調査では、竪穴住居のプランを確認し、薄い覆土を掘り下げ床面と炉跡を確認し、柱穴を掘り下げて、ひとまず竪穴住居1軒分を完掘することになった。縄文時代の地域社会を探る第一歩が居住の痕跡の把握にあるとすれば、今回の発見は、まずその第一歩にあたる。それらから出土する遺物、あるいは遺構の中にほかの集団との連携を指し示す材料を見出すことは果たして可能であろうか。

その手掛かりを得ることは、縄文時代の地域社会を探る上で大変重要な課題であるといえよう。戸ノ内貝塚の第4次調査は、そのような学術的な関心に対して、考古学的な見通しを得ることを目的に実施した。

(高橋龍三郎)

### 1. 調査組織

本次の調査概要および調査組織は以下のとおりである。

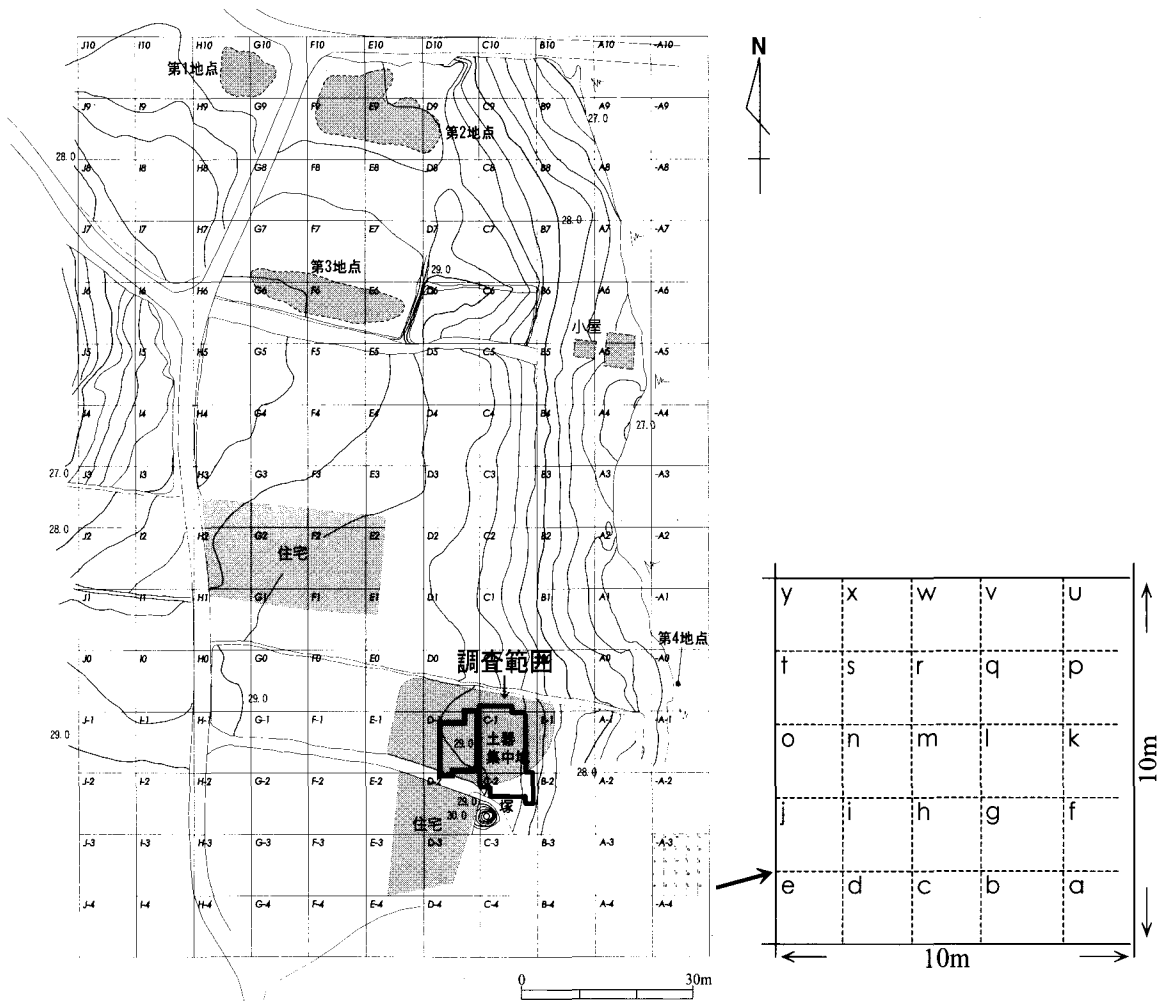
調査名称：戸ノ内貝塚第4次発掘調査

調査主体：早稲田大学文学部考古学研究室

調査期間：2007年9月1日～同月24日（9日・16日・17日を除く）

調査の種類：学術調査

調査面積：152㎡（申請時）



第1図 戸ノ内貝塚周辺地形図および第4次調査区

調査担当：高橋龍三郎（教授）・菊地有希子（非常勤講師：考古学実習Ⅰ・Ⅱ担当）

調査指導：菊池徹夫（教授）・岡内三眞（教授）・近藤二郎（教授）・寺崎秀一郎（准教授）

山形真理子（客員准教授）

：能勢幸枝（印旛村教育委員会生涯学習課文化財係）・印旛村教育委員会

千葉県教育庁教育振興部文化財課・千葉県教育委員会

調査主任：井出浩正

調査庶務：森下壽典

調査参加者：米澤雅美・菅原広史・南澤武蔵・赤司千恵・川畑隼人・中門亮太・阿部恵・大網信良・斉藤直幸・嶋本紗枝・新海達也・高橋想・根兵皇平（以上大学院生）、青木弘・千田麗紗子・長谷川陽・三浦恵・石井彩子・鈴木健太・谷典子・林智久・平原信崇・

新井才二・石井瑤子・伊藤郁・岩井聖吾・大里宗也・大橋萌・岡松彩香・笠原隆太郎・加藤由希子・金澤玄・郷英毅・小島信太郎・斉藤愛・酒井貴広・櫻井孝之・瀬戸口広明・高梨朋哉・谷口枝里夏・服部智至・原田康弘・堀内駿・堀籠好太・松浦理恵・松崎哲也・三宅雄太郎・森川真帆・森戸一彦・盛野仁美・八林朋宏（以上学部生）・松吉祐希（教育学部学部生）・鈴木朋美（同志社大学学部生）

## 2. 調査の経過と方法

これまで早稲田大学文学部考古学研究室は、考古学の正課授業である考古学実習Ⅰ・Ⅱの夏季合宿調査として、千葉県印旛郡印旛村師戸に所在する戸ノ内貝塚の調査を実施している（第1図）。2003年度春季の測量調査を端緒に、2004年度の第1次発掘調査から今回報告する第4次発掘調査までを実施している。

第4次発掘調査は第3次発掘調査からの継続調査である（第2図）。特に第3次発掘調査終了段階において検出し「住居跡推定遺構」と仮称した遺構の特定と、調査区内で新たに検出された土坑の発掘調査を主目的とした。その結果、第4次調査では、新たに約115基の土坑と縄文時代晩期相当の住居跡を1軒検出し床面までの掘削を行った。また、土坑の調査では、調査区南東のP203において縄文時代後期後葉の曾谷式土器の大形破片をはじめとする後期段階の土坑を中心に発掘を行なった。

発掘はこれまでと同様に、遣り方測量とオートレベルを用いた遺物のドット上げを中心に、光波測距儀と電子平板を用いた。特に土坑や住居跡など遺構検出の遺物は、極力全点ドット上げとし、遺物の出土状況や遺構との関連、遺構間接合などの把握に努めた。また、土坑や住居跡からは土壌サンプルを採取し、住居跡炉跡内および住居硬化面から採取した炭化物については(株)パレオラボに依頼し炭素年代測定を行った。これらの測定値は既存の他の事例と矛盾しない年代数値を得ることができた。

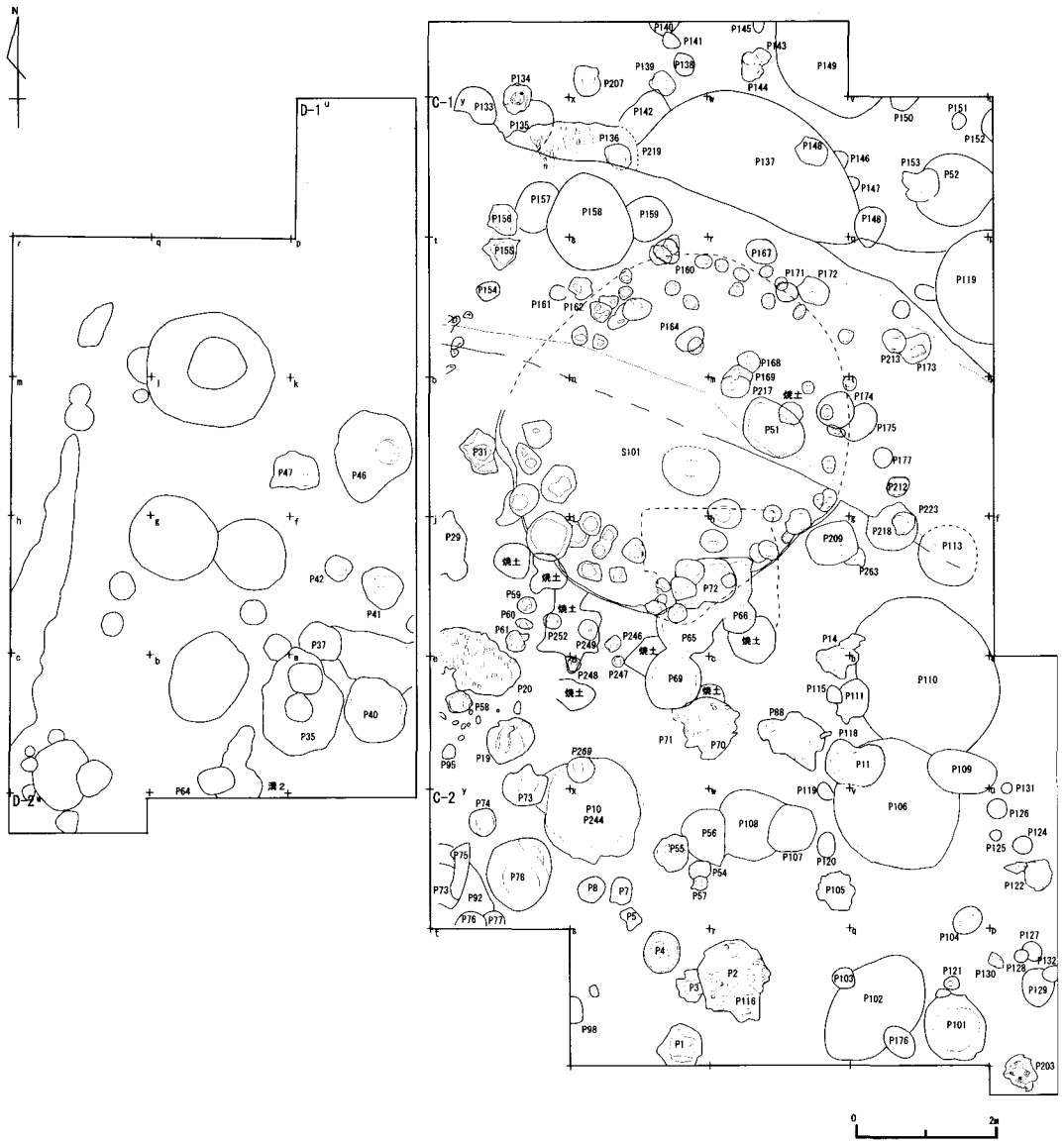
なお、第4次発掘調査で検出された遺物ならびに関連する図面類は全て本学文学部考古学研究室において保管し、整理作業を継続している。（井出 浩正）

## 3. 検出された遺構と遺物

### ① SI01：1号住居跡（第3図）

**位置：**C-1グリッド。第4次調査発掘区のやや北寄り、表土層下の地山面（ハードルーム面）で検出した。標高は約28.6mである。

**状態：**古墳時代中期と推定される溝状遺構によって、住居跡北西から南東にかけて半分程度が破壊され、住居南壁の一部は縄文時代早期の炉穴と重複する。確認面から住居床面までの深さは最深部で11cmである。また、SI01に伴わないピット（P51、P168、P169、P217）もある。



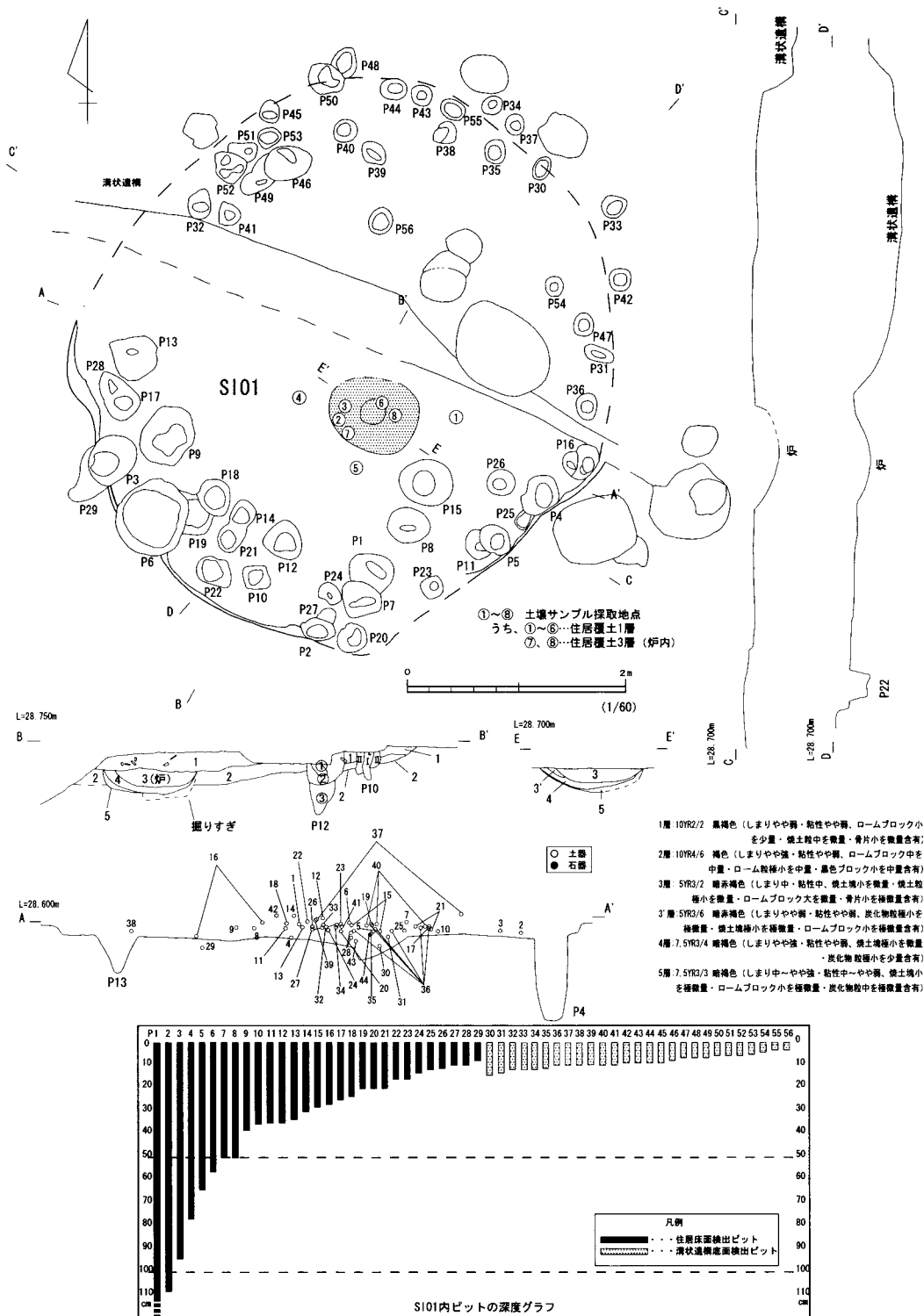
※S101に伴うピット群については新規番号をふった。

第2図 戸ノ内貝塚第4次遺構平面図

**規模・形態：**推定長軸約5m、同短軸約4.6mを測り、楕円形を呈していたと考えられる。

**覆土の堆積：**現存部分では2層に分かれ、黒褐・褐色を帯びる。

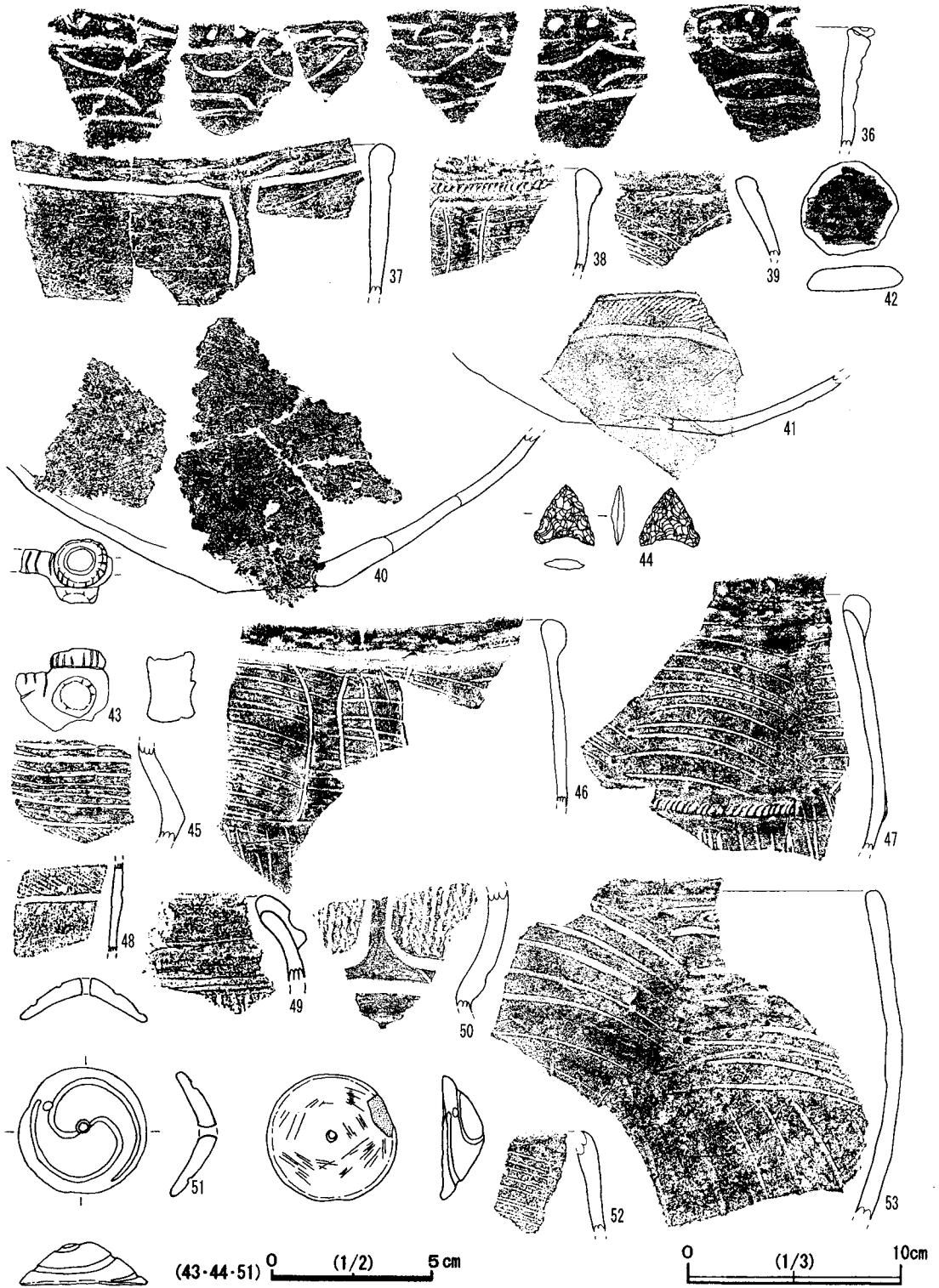
**炉跡：**住居跡中心よりやや南から地床炉が1基検出された。地床炉は平面楕円形であり、長軸0.88m、短軸0.6mを測る。底面には明瞭な火床面、硬化面は認められないが、床面付近から約15cmの掘り込みと焼土が検出された。



第3図 1号住居跡



第4图 1号住居跡出土遺物 (S=1/3)



第5図 1号住居跡出土遺物 (S=1/3、ただし43・44・51は1/2)

第1表 1号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程序ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
1	早期 条痕文系	深鉢	口縁部	ナデ調整による条痕が残る	:粗いナデ :粗いナデ	:10YR5/4 :10YR5/4	繊維を少量含有、密	
2	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	複節縄文LRL→幅約12mmの棒状工具を用いた単沈線を横位に巡らす→幅約9mmの棒状工具を用いた2本1単位の沈線による懸垂文→懸垂文間はナデによる地文の磨消	:ナデ :丁寧なナデ	:7.5YR5/4 :5YR4/6	φ1mm以下の白色粒子を中量、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	
3	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RL→幅約3mmの棒状工具を用いた2本1組の沈線による懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	: :丁寧なナデ	:7.5YR6/6 :7.5YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
4	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部上半	丸みのある隆帯による楕円形の区画→隆帯脇を幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で押さえる→区画内に単節縄文LRを充填	: :ナデ	:5YR3/2 :10YR5/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
5	中期後葉 加曾利E3~ E4式	深鉢	胴部上半	断面三角形の隆帯及び幅約5mmの棒状工具を用いた沈線による渦巻状の文様→幅約5mmの棒状工具を用いた沈線による懸垂文→8~9本単位の櫛歯状工具を用いた条線	: :ナデ	:7.5YR6/6 :10YR5/3	φ1mm以下の白色粒子を多量、φ1mm以下の雲母片を少量含有、やや密	
6	中期後葉→ 後期初頭	深鉢	口縁部	幅約1mmの条線を縦位に施す	: :丁寧なナデ	:10YR6/4 :10YR6/4	φ2mm以下の雲母片を多量、φ1mm以下の透明粒子を少量含有、密	
7	後期初頭 称名寺式	深鉢	胴部	撚糸R→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による区画→無文部をケズリにより一段低くする	:ナデ :ナデ	:10YR4/1 :10YR4/2	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
8	後期中葉 加曾利B式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→断面台形の粘土紐を波頂部に沿って貼付→粘土紐脇を幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で押さえる→粘土紐上にφ約4mmの円形の押圧→粘土紐に相対する形で幅約3mmの棒状工具を用いた弧状の沈線 内面は波頂部に半円形の押圧、幅約3mmの棒状工具を用いた浅い沈線	:丁寧なナデ :ナデ	:10YR2/2 :2.5YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を多量含有、密	
9	後期中葉 加曾利B式	深鉢 (粗製)	口縁部	撚糸L→断面扁平な粘土紐を口唇に貼付→粘土紐上に楕円形の押圧→幅約3mmの棒状工具を用いた条線を横位に施す	: :丁寧なナデ	:2.5YR4/2 :2.5YR3/1	φ1mm以下の雲母片を中量、透明粒子、赤色粒子を微量含有、密	
10	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇直上に幅約4mmの棒状工具を用いた沈線を巡らす 単節縄文LR→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で口縁部帯状縄文、および楕円形の区画→無文部はミガキによる磨消	:ミガキ :丁寧なナデ	:5YR4/6 :7.5YR4/3	φ2mm以下の白色粒子、φ1mm以下の雲母片を多量、φ2mm以下の石英粒を少量含有、密	
11	後期後葉	深鉢	胴部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による曲線的な文様→単節縄文RL	:丁寧なナデ :ナデ	:10YR1.7/1 :10YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を多量、赤色粒子を少量含有、密	
12	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	口縁部下に断面半円形の微隆起帯を作出→口縁部上方および微隆起帯上に単節縄文RL→帯縄文下に三角形の刺突列を沿わせる	:丁寧なナデ :ナデ	:5YR4/4 :5YR4/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を中量含有、密	
13	後期後葉	深鉢	口縁部	口唇に幅約1.5mmの棒状工具を用いた刻み目を巡らせる→口唇直上に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を巡らせる 胴部は幅約2mmの棒状工具を用いた沈線で文様を描く	:ナデ :	:10YR1.7/1 :10YR1.7/1	φ1mm以下の雲母片を少量含有、密	
14	後期後葉 安行2式	深鉢	胴部	断面三角形の微隆起帯上に刻み目を施す→微隆起帯の両脇に幅約1.5mmの棒状工具を用いた沈線を沿わせる→同様の沈線で文様を描く	: :ナデ	:10YR6/4 :10YR6/4	φ1mm以下の黒色粒子、雲母片を少量、赤色粒子、透明粒子を微量含有、密	
15	後期後葉 安行2式	深鉢	胴部	断面扁平な隆帯貼付→隆帯脇に幅約1.5mmの棒状工具を用いた沈線を沿わせる→隆帯上に肢鼻状の貼付→隆帯上及び胴下半部に単節縄文RL→同様の沈線で文様を描く	:ケズリ :ナデ	:10YR5/3 :10YR4/2	φ1mm以下の白色粒子、黒色粒子を中量、赤色粒子を少量含有、密	



第1表 1号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
16	後期後葉 安行2式	深鉢 (粗製)	胴部	幅約3mmの棒状工具を用いた横位の条線→断面扁平な粘土紐を横位・縦位に貼付→粘土紐上に指頭押圧を施す	: ナデ	: 10YR1.7/1 : 2.5YR4/4	φ1mm以下の雲母片を多量、赤色粒を微量含有、密	
17	後期後葉 安行2式	深鉢 (粗製)	胴部	幅約1mmの棒状工具を用いた横位・斜位の条線→断面扁平な粘土紐を横位に貼付→粘土紐上に指頭押圧を施す	: 横位のナデ	: 10YR5/4 : 10YR4/3	φ1mm以下の雲母片を多量、赤色粒子を少量含有、密	
18	後期後葉 安行2式	深鉢 (粗製)	胴部	幅約1.5mmの棒状工具を用いた横位・斜位の条線→断面扁平な粘土紐貼付→粘土紐上に指頭押圧を施す	: ナデ : ナデ	: 10YR4/2 : 7.5YR4/3	φ1mm以下の雲母片を多量、白色粒子を少量含有、密	
19	晩期前葉 安行3b式	深鉢	胴部	単節縄文LR→幅約4mmの棒状工具を用いた沈線による区画→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による円形の文様→円の中心に同様の工具を用いた短沈線	: ナデ : 丁寧なナデ	: 5Y2/1 : 10YR1.7/1	φ2mm以下の雲母片を中量、φ1mm以下の白色粒子を少量含有、密	
20	晩期前葉 姥山～前浦 式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→指によると思われる太い沈線→曲線的、三叉状の区画	: : ナデ	: 10YR4/2 : 7.5YR5/4	φ1mm以下の黒色粒子、雲母片を少量含有、密	
21	晩期前葉 姥山2式	深鉢	口縁部	波頂部に粘土紐を貼付→口唇に単節縄文RL→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を2本口縁に沿って描く	: ナデ : 丁寧なナデ	: 7.5YR2/1 : 7.5YR4/3	φ1mm以下の雲母片、白色粒子を少量含有、密	
22	晩期前葉 安行3b式	鉢 or 深鉢	口縁部	口唇に単節縄文RL→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による「の」の字文、八の字状の区画→区画内の磨消 口唇直上には同様の工具で短沈線を描く	: ミガキ : 丁寧なナデ	: 10YR4/2 : 10YR3/2	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
23	晩期前葉 安行3b式	深鉢	胴部	無節縄文L→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による対弧状の区画文→区画内の磨消	: ケズリ : ナデ	: 7.5YR3/4 : 2.5YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片、砂を少量含有、密	
24	晩期前葉 安行3b式	深鉢	口縁部	口唇に粘土粒貼付→粘土粒上に刻み目を施す 口縁部に単節縄文RL→幅約4mmの沈線を2本横位に巡らす→沈線間の磨消	: ナデ : ナデ	: 10YR6/4 : 10YR6/4	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子を少量含有、密	
25	晩期前葉 安行3b式	深鉢	口縁部	口唇に粘土粒貼付により小突起を作出→突起上に幅約3mmの棒状工具を用いた刻み目を施す→同様の工具で口唇に弧状の沈線 胴部に単節縄文RLを帯状に施文→帯状縄文の向脇に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線突起下に穿孔の跡が見られる	: ナデ : 丁寧なナデ	: 2.5YR2/1 : 2.5YR2/1	φ1mm以下の雲母片、砂を少量含有、密	
26	晩期前葉 安行3c式	深鉢	胴部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で木葉状の区画文を描く→区画内に細密沈線を充填	: ナデ : ケズリ	: 2.5YR2/1 : 2.5YR2/1	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子を少量含有、密	
27	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	胴部	幅約1mmの棒状工具を用いた横位の条線→幅約2mmの棒状工具を用いた縦区画→区画内の条線の磨消→粘土紐貼付→粘土紐上に指頭押圧を施す	: ナデ : 丁寧なナデ	: 5YR4/6 : 10YR3/2	φ1mm以下の白色粒子、黒色粒子、雲母片を少量含有、密	
28	晩期前葉 安行3b式	鉢 or 深鉢	口縁部	口唇内面に粘土粒貼付→粘土粒上に幅約3.5mmの棒状工具を用いた弧状の沈線 口縁部は幅約2mmの棒状工具を用いた沈線による横位の区画→区画内に同様の工具を用いた弧状の沈線による入組文を描く	: ミガキ : ナデ	: 10YR3/1 : 10YR2/1	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子を少量含有、密	
29	晩期前葉 姥山2式	深鉢	胴部	幅約4mmの棒状工具を用いた沈線による円形の文様→円の中心に同様の工具による刺突→同様の沈線で区画文を描く	: ナデ : 丁寧なナデ	: 5YR2/1 : 5YR2/1	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子を少量含有、密	
30	晩期前葉 姥山2式	深鉢	胴部	全体にケズリ調整を施す→幅約2mmの棒状工具を用いた沈線を二本横位に巡らす	: ケズリ : 丁寧なナデ	: 5YR3/6 : 7.5YR4/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片、砂を少量含有、密	
31	晩期前葉 姥山2式	深鉢	胴部下半	全体にケズリ調整を施す→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を二本横位に巡らす	: ケズリ : 丁寧なナデ	: 2.5YR2/1 : 7.5YR2/2	φ1mm以下の赤色粒子、雲母片を少量含有、密	

第1表 1号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
32	晩期前葉 安行3c式	深鉢	口縁部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による横位の区画→区画内に右方向からφ5mmの棒状工具を用いた刺突、φ8mmの穿孔 口唇に粘土粒貼付による突起の痕	: ナデ : ケズリ	: 5YR4/4 : 10YR3/4	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
33	晩期前葉 安行3c式	深鉢	胴部	全体にケズリ調整を施す→幅約4mmの棒状工具を用いた沈線を二本横位に巡らす→沈線間に粘土粒貼付	: ケズリ : 丁寧なナデ	: 10YR3/1 : 5YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
34	晩期前葉 安行3c式	深鉢	口縁部	口唇に二股の突起→突起間に押圧→内側に幅約2mmの棒状工具を用いた短沈線 口縁部は同様の沈線を二本横位に巡らす→内面には幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を横位に巡らす	: : ナデ	: 10YR3/1 : 10YR3/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
35	晩期前葉 安行3c式	深鉢	口縁部	波頂部に粘土紐を貼付→粘土紐上に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線 同様の沈線で区画文→粘土粒を貼付→粘土粒上にφ5mmの棒状工具を用いた刺突	: : ナデ	: 5YR1.7/1 : 7.5YR3/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
36	晩期前葉 滋賀里式か	鉢 or 深鉢	口縁部	口唇に幅約4mmの棒状工具を用いた弧状の沈線→粘土粒貼付→粘土粒上に同様の工具を用いた2単位の刺突 同様の工具を用いた沈線で横位の区画及び対弧文	: ナデ : 丁寧なナデ	: 7.5YR5/6 : 5Y2/1	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
37	晩期前葉 姥山2~3式	深鉢	口縁部	全体にケズリ調整→幅約4mmの棒状工具を用いた沈線による稜状文 口唇やや肥厚	: ケズリ : 丁寧なナデ	: 7.5YR5/4 : 7.5YR5/4	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
38	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部	幅約0.5mmの棒状工具を用いた横位の条線→幅約1mmの棒状工具を用いた沈線による縦区画→口唇に粘土紐貼り付け→粘土紐上に指頭押圧を施す	: : 丁寧なナデ	: 5YR2/1 : 5YR2/1	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量、赤色粒子を微量含有、密	
39	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部	全体にケズリ調整を施す→幅約1mmの棒状工具を用いた横位の条線	: ケズリ : 強めのナデ	: 7.5YR5/4 : 7.5YR5/4	φ1mm以下の雲母片を中量、砂を少量、赤色粒子を微量含有、密	
40	晩期前葉 滋賀里式か	鉢 or 深鉢	胴部下半 ~底部	ケズリ調整を施す	: ケズリ : 丁寧なナデ	: 5YR2/1 : 5YR2/1	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	No.36と同一か
41	晩期前葉 安行3b式	深鉢	底部	単節縄文RL→幅約5mmの棒状工具を用いた沈線による区画	: ナデ : 丁寧なナデ	: 10YR4/3 : 10YR5/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
42	中期後葉	土製 円盤	略完形	丁寧なナデが施される 一部に口縁部が残る	: 丁寧なナデ : 丁寧なナデ	: 5YR5/6 : 10YR5/4	φ1mm以下の雲母片を中量、白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
43	後期後葉	異形 台付	口縁部突起	幅約0.5mmの筒状工具を用いた刻みを施す	: :	: 10YR6/4 : 10YR3/1	φ1mm以下の白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
45	後期中葉 加曾利B2式	鉢	胴部上半	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を横位に充填→幅約0.1mmの棒状工具を用いた斜沈線→幅約1mmの棒状工具を用いた沈線による横位の沈線で区画	: ナデ : ナデ	: 10YR3/2 : 10YR2/2	砂を多量、φ1mm以下の雲母片を中量含有、P19出土	密
46	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部	幅約0.1mmの棒状工具を用いた横位の弧状の条線→幅約1mmの棒状工具を用いた沈線による弧状の縦区画 口唇に粘土紐貼付	: ナデ : ケズリ	: 7.5YR5/6 : 5YR5/6	φ1mm以下の白色粒子、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	P5出土
47	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部~ 胴部上半	幅約1mmの棒状工具を用いた横位の弧状及び縦位の条線→粘土紐貼付→粘土紐上に指頭押圧	: ナデ : 丁寧なナデ	: 5YR5/6 : 5YR5/6	φ1mm以下の白色粒子、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	P5出土
48	晩期前葉 安行3b式	深鉢	胴部	単節縄文LR→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による横位の区画	: ナデ : ナデ	: 10YR4/2 : 7.5YR4/4	φ1mm以下の白色粒子を中量、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	P3出土

第1表 1号住居跡出土遺物観察表(4)

No.	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程はか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
49	中期後葉 加曾利 E3式	深鉢	口縁部	幅約8mmの棒状工具を用いた沈線、降帯による横位の区画→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を数本垂下	: ナデ : ナデ	: 10YR3/2 : 10YR1.7/1	φ1mm以下の白色粒子を多量、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	P6出土
50	中期後葉 加曾利 E3式	深鉢	口縁部下半	撚糸 R→幅約4mmの棒状工具を用いた隅丸長方形の区画 幅約5mmの棒状工具を用いた沈線を横位に巡らす	: ナデ : ナデ	: 2.5YR4/6 : 10YR4/2	φ1mm以下の白色粒子を中量、赤色粒子、雲母片を少量含有、密	P9出土
51	晩期前葉	土製品	完形	幅約2mmの棒状工具を用いた沈線による巴状の文様→底部に同様の工具による穿孔	: ミガキ : 丁寧なナデ	: 5YR2/1 : 5YR2/1	φ1mm以下の雲母片を中量含有、密	P29出土 赤色顔料付着
52	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部	幅約1mmの棒状工具を用いた横位の条線	: : ケズリ	: 10YR3/3 : 10YR2/2	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	P12出土
53	晩期前葉 安行3式	深鉢 (粗製)	口縁部～ 胴部上半	幅約3mmの棒状工具を用いた横位・斜位の弧状の条線	: ナデ : ケズリ	: 10YR3/3 : 7.5YR4/6	φ1mm以下の赤色粒子、雲母片を中量、白色粒子、砂を少量含有、密	P1出土

No.	器種	石材	法量				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
44	石鏃	黒曜石	20 mm	20 mm	3 mm	1.0 g	凹基無茎

**内部施設:** 本住居跡は表土から非常に浅く、壁はわずかに残存するのみである。床面は住居中央に向かってわずかに傾斜し、北東部分が一部堅緻だが全体としては比較的しまりが弱い。

残存した住居床面内から検出されたピットは29基、溝状遺構の底面内から検出された SI01に伴うと想定されるピットは27基であり、合計56基確認された。しかし北側は大部分が破壊されているため、実際のピット数はさらに多かったと考えられる。住居プランに沿って径の小さい壁柱穴と想定されるピットを多数検出したが、これらは溝状遺構の底面でも確認され西壁部を除いてほぼ全周する。各ピットの深さにはばらつきが見られるが、住居床面から20～40cmのものが比較的多く、溝状遺構内のピットは底面から深さ10cm以下のものが大半であった。住居跡内からは規則的な配置を持つ明瞭な主柱穴は判定できず、本住居跡は壁柱穴のみの構造であった可能性が高い。

**出土遺物:** 覆土、ピット、炉跡内より多数の土器が出土した。縄文時代早期茅山式、中期加曾利 E 式等が混じるが、主体は晩期前葉安行3a～3b 式、姥山Ⅱ式段階の精製土器や粗製土器(第4図)である。円文や入組三叉文、楕円形の区画文など、幅の不均一な沈線で描かれたものが多い。その他、P29内から円錐状の土製品(第5図51)、黒曜石製の石鏃(第5図44)などが検出された。

**植物依存体分析:** 炉跡付近及び直上の覆土1層(図中①～⑥)と炉内焼土層の3層(同図⑦、⑧)について土壌サンプルを採取、フローテーション作業による炭化物の回収を試みた。しかし回収できた炭化物は非常に少なく、詳細については後述するが有益な情報を得ることは出来なかった。

**時期：**炉跡内から姥山式土器が検出されており（第5図37）、当該住居跡の所属時期と考えられる。

**年代測定値：**土壌サンプル①と⑦から検出された炭化材を用いて加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、土壌サンプル⑦（炉跡内サンプル）からは $2815 \pm 25\text{yr}14\text{CBP}$ 、また同①（硬化面サンプル）からは $3050 \pm 25\text{yr}14\text{CBP}$ という結果が得られた。

（根兵皇平）

## ②土坑

土坑の調査は昨年度調査までに確認された遺構の発掘調査と新たな土坑の検出を併行した。その結果、新たに約115基の土坑が確認され、前年度調査までの欠番を加味すると累計279基（SI01柱穴とみなされるピットも含む）となった。今年度調査ではそのうち77基について発掘調査を進めたが、その中でも本稿ではこれまでに整理作業が終了している計4基の土坑について報告を行なう。

なお、本稿では土坑の名称をP+番号という略式記号で表すこととする。（大網信良）

## P136（第6図）

**位置：**発掘区北西、C-1x・yグリッドにまたがる。

**検出状況：**遺構南半を昨年度に調査が行われた溝状遺構に切り込まれ、また東側をP137に、西側をP135に切り込まれる。さらに、遺構確認時には認識されなかったが、掘削が進むにつれ遺構中央にP222が、東部にはP219が入り込む状況が確認された。特にP219は土層断面等について十分な記録が行うことができず、遺構掘り方のみの提示となった。

**規模・形態：**長軸165cm×短軸100cmの楕円形を呈し、底面までの深さは最深部で57cmを測る。底面は多くの小穴を伴い、断面は緩やかに立ち上がる。

**覆土の堆積：**本遺構の遺構確認時での上色は黒褐色であり、遺構覆土は4層に分けられた。

**出土遺物（第8図1～17）：**本遺構出土遺物の総数は129点で、その内訳は土器110点、石器7点、炭化物5点、骨片7点である。その中でも特に縄文時代中期後葉に比定される連弧文土器（第8図1）は、遺構東半より小破片が比較的まとまった状態で出土した。なお、本遺構南端の出土遺物は前年度に調査された溝状遺構の掘り残り箇所からの出土の可能性がある。

**所属時期：**出土遺物より縄文時代中期後葉段階に比定される。（大網信良・新海達也）

## P10（第6図）

**位置：**発掘区南東、C-1d・eグリッドにまたがる。

**検出状況：**遺構西部をP73に、北西部をP269に切り込まれる。確認面では中心部に径約100cmの黒褐色土（7.5YR2/2）が広がり、その周囲をさらに径140cmの黄褐色土が覆っていたため、当初

は中心部をP10とし、それに切り込まれるものとして黄褐色土の範囲をP244と認定していた。しかし明らかに中心を捉えた遺構配置や、北東に近接するP70とP71の関係（未報告だが、土色および確認面での遺構配置状況に類似性が認められる）から、P10とP244を統合して改めてP10という一つの遺構とし、調査を続行した。

**規模・形態**：平面形態は径145cmの略円形を呈し、底面までの深さは115cmを測る。断面はほぼ垂直に立ち上がる。

**覆土の堆積**：遺構覆土は9層に分けられるが、大別すると上記の黒褐色土と黄褐色土の2層である。土層断面でも旧称P10が旧称P244に入れ子状に入り込む状況が認められた。ただし両者の間に付き固めたような明確な境界は見出されなかった。

**出土遺物**（第9図21～39）：出土遺物は総数538点で、内訳は土器488点、石器11点、炭化物35点、土製品3点、焼成粘土塊1点である。遺物は大半が黒褐色土、とりわけ第4層からの出土で、黄褐色土との境に沿って遺物が斜位に傾くような出土状況が看取された。土器は縄文時代中期末葉、加曽利E4式期の所産が大部分で、一部後期後葉段階のものも含まれる。

**所属時期**：出土遺物より縄文時代中期末葉段階に比定される。（大網信良・新海達也）

#### P203（第6図）

**位置**：発掘区南東隅、B-2p・kグリッドにまたがる。

**検出状況**：他遺構との重複は認められない。遺構確認段階で台付鉢（第8図19）の上端がすでに露出していた。

**規模・形態**：平面形態は隅円長方形を呈する。長軸55cm×短軸37cm、底面までの深さは最深部で54cmを測る。ピット底面の四隅に杭で穿たれたような掘り込み（掘削痕あるいは下部施設か）が確認された。

**覆土の堆積**：確認面での土色は7.5YR3/3の暗褐色を呈し、近接するP130と類似する。遺構覆土は4層に分けられ、特に2層と2'層は近似するが炭化物やシルトの割合から区別した。

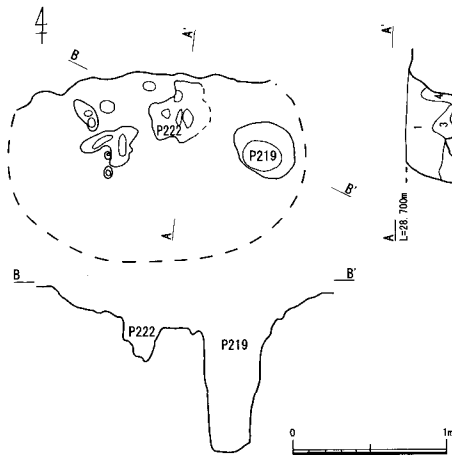
**出土遺物**（第8図18・19）：本遺構の出土遺物総数は23点で、内訳は土器22点、石器1点である。第8図19は遺構中央に正位で埋設されていたと思われる台付鉢の胴部下半で、横位の条線が施される。後期後半段階に比定されよう。第8図18は遺構中央、確認面から33cmの深さで表面を上に向けた状態で検出された。いわゆる瓢形を呈する深鉢形土器で、口縁部～胴部中半の大型破片である。後期後葉段階（曾谷式か）に比定される。

**所属時期**：出土遺物より後期後葉段階に比定される。（大網信良・高橋 想）

#### P173（第7図）

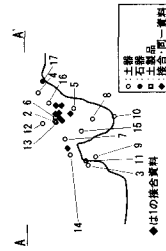
**位置**：発掘区北東、C-1qグリッドに位置する。

P136

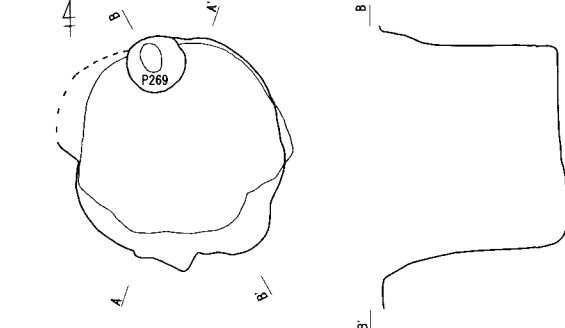


P136 - 222

1. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまり中・粘性やや弱い、ローム粒小を極微量・焼土極小を微量・炭化物極小を極微量含有)
  2. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまり中・粘性中、ローム粒中を少量・焼土小を微量・骨片小を微量含有)
  3. 7.5YR4/4 暗褐色 (しまり中・粘性中、ローム粒小を極微量含有)
  4. 7.5YR4/6 褐色 (しまり中・粘性中、ローム粒小を極微量含有)
  5. 7.5YR4/4 褐色 (しまり中・粘性やや強い、ローム粒極小を極微量・焼土小を少量含有)
- ※第5層のみP222覆土

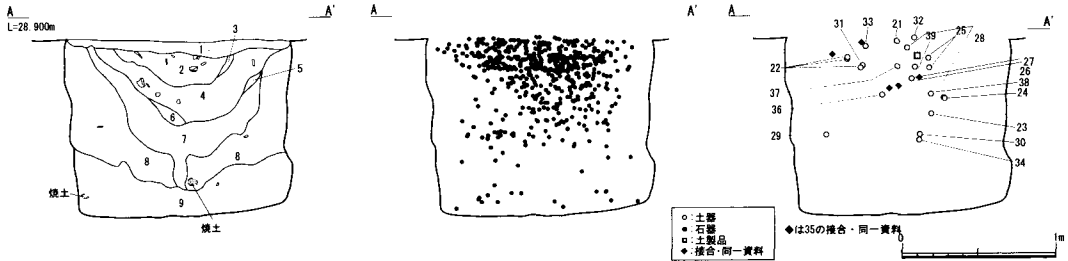


P10

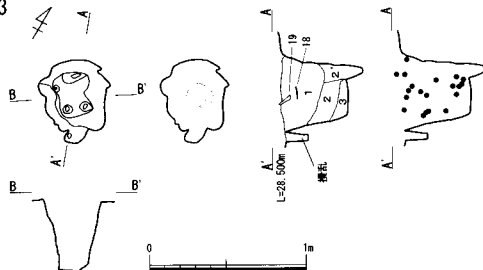


P10

1. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまりやや強い・粘性やや弱い、ローム粒極大を微量・焼土小を極微量含有)
2. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまりやや強い・粘性弱い、ローム粒極大を微量・焼土大を微量含有)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまりやや強い・粘性やや弱い、ローム粒大を微量・焼土大を極微量・炭化物大含有)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 (しまり中・粘性中、ローム粒極大を微量・焼土中を極微量・炭化物大を多量含有)
5. 7.5YR3/4 暗褐色 (しまりやや強い・粘性やや弱い、ローム粒極大を微量・焼土小を極微量・炭化物小を微量含有)
6. 7.5YR3/4 暗褐色 (しまり弱い・粘性強い、ローム粒極大を微量・焼土小を微量・炭化物を多量含有)
7. 7.5YR3/4 暗褐色 (しまり弱い・粘性強い、ローム粒極大を少量・焼土小を微量・炭化物を多量含有)
8. 7.5YR3/4 暗褐色 (しまりやや強い・粘性やや強い、ローム粒極大を微量・焼土極大・炭化物を微量含有)
9. 7.5YR3/4 暗褐色 (しまり弱い・粘性強い、ローム粒極大を多量・炭化物中を含有、25mmの焼土ブロックを1点含有)



P203

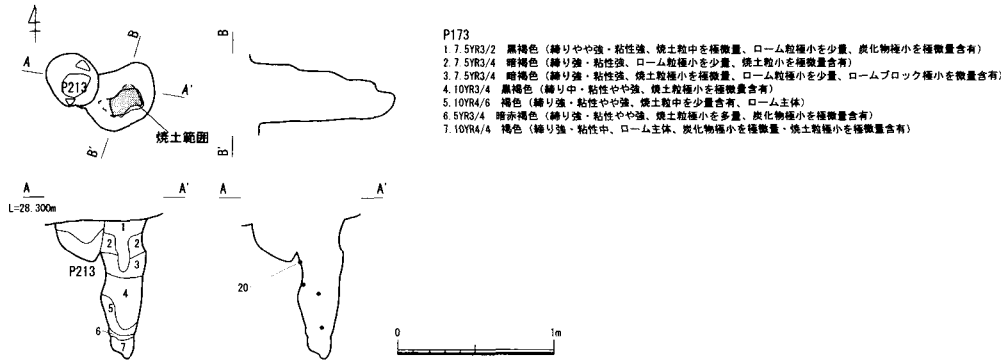


P203

1. 7.5YR 3/3 暗褐色 (しまり中・粘性中、ローム粒極小を微量含有)
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 (しまり中・粘性やや強、ロームブロック小を極微量・ロームブロック極小を微量・炭化物極小を少量含有)
3. 7.5YR 3/3 褐色 (しまり中・粘性やや強、シルト粒小を少量、ローム粒極小を微量含有)
3. 7.5YR 4/4 暗褐色 (しまり強・粘性やや強、炭化物極小を極微量含有)

第6図 検出された土坑と遺物垂直分布図 (1) (S=1/45)

P173



第7図 検出された土坑と遺物垂直分布図(2) (S=1/45)

**検出状況：**昨年度に調査された溝状遺構の底面より検出された。遺構の北西部分が P213により切り込まれる。

**規模・形態：**平面形態はくずれた楕円形で、断面は一部屈曲しつつ、底面から上方へほぼ垂直に立ち上がる。長軸48cm×短軸36cm、底面までの深さは90cmを測る。

**覆土の堆積：**確認面での土色は7.5YR3/2の黒褐色で、北西に近接する P172と類似する。遺構覆土は7層に分けられ、最下層からは平面25cm×13cm、厚さ5cmの範囲で焼土の堆積が認められた。

**出土遺物（第8図20）：**本遺構の出土遺物総数は4点である。20は豚鼻状の貼付を施した口縁部破片で、晩期前葉安行3a式期に比定される。

**所属時期：**出土遺物より晩期前葉段階に比定されよう。

（大網信良・斎藤直幸）

#### 4. 1号住居跡（SI01）の検討

##### ①植物遺存体分析

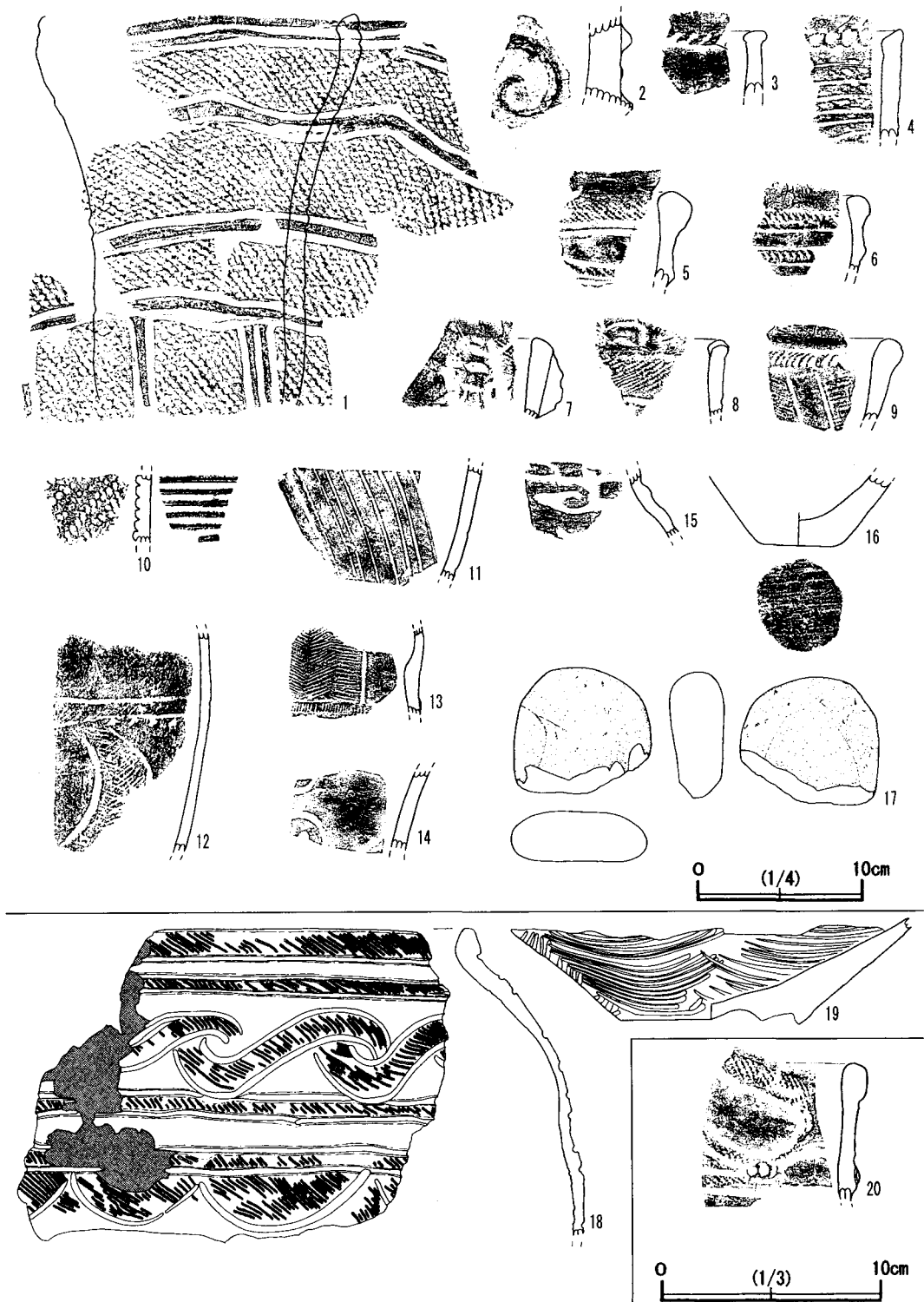
###### 【土壌採取】

1号住居跡（SI01）では炉およびその周辺から、計8点（37.2ℓ、約19kg）の土壌サンプルを採取し炭化物の回収を試みた（第3図）。各土壌サンプルは2.2～6ℓ、平均すると4.65ℓを採取した。そのうち①～⑥の6点は炉の周辺もしくは直上の住居覆土1層から、⑦、⑧の2点は炉の焼土層である覆土3層から採取したものである。肉眼では炭化物はほとんど確認できなかった。

###### 【フローテーションの方法】

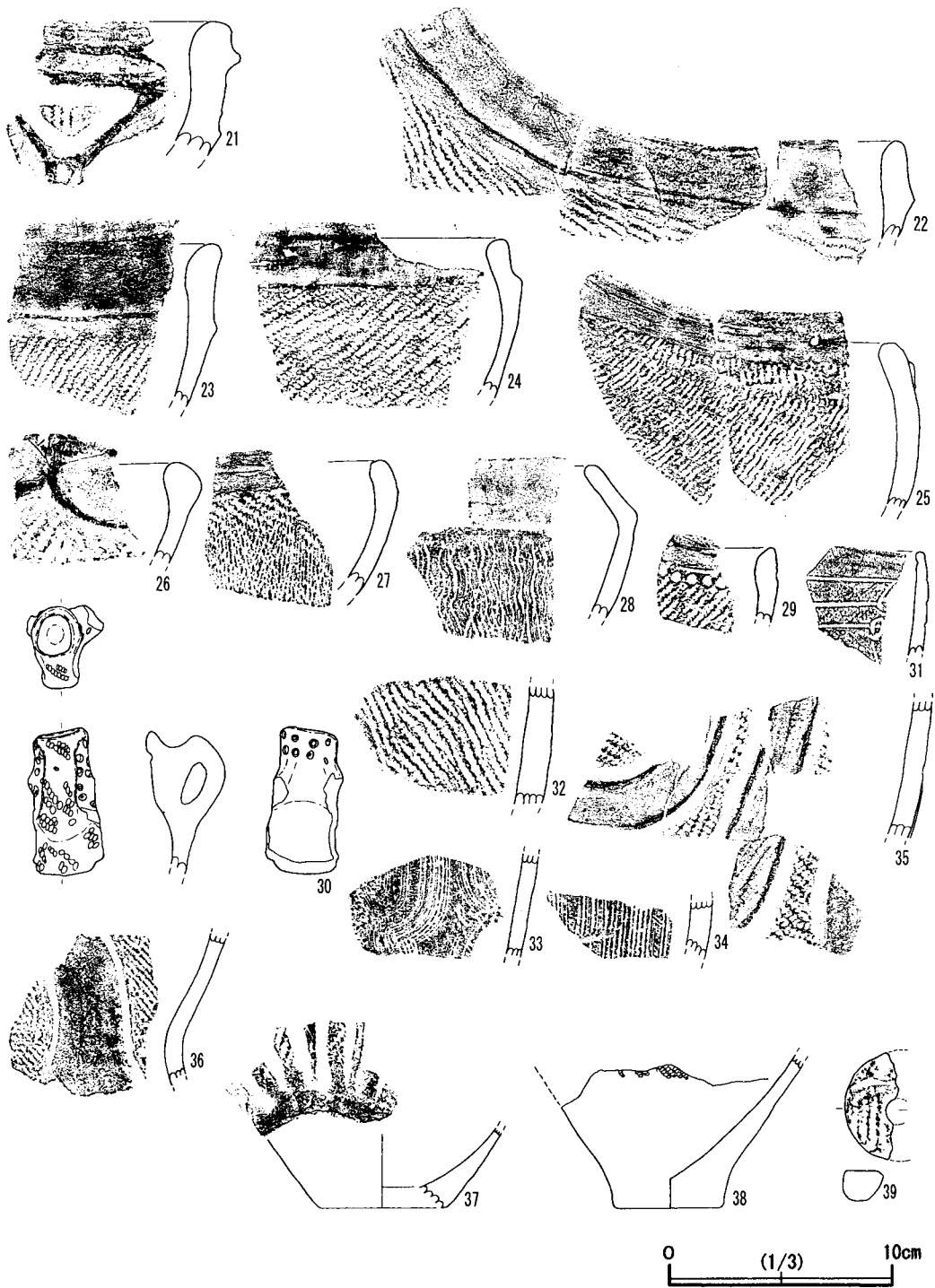
採取した土は乾燥させ、マニュアル・フローテーションにかけた。まず浅いタライに水を張り、篩（メッシュ約0.8mm）を浮かべてその中に土を投入する。篩を上下に揺らして泥をタライの底に落とし、炭化物を浮かせて網で掬うという方法を取った。

###### 【結果】



第8図 P136・173・203出土遺物 (S=1/3、ただし17のみ1/4)





第9図 P10出土遺物 (S=1/3)

第2表 土坑出土遺物観察表(1)

No.	遺構	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工工程はか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
1	P136	中期後葉 加曾利 E3式 (連弧文)	深鉢 波状か	口縁部～ 胴部中半 1/3	(全体)複節縄文 RLR→キャリパー 形の括れ部に幅約4mmの棒状工具 を用いた2本一単位の平行沈線を 横位に巡らす→沈線間は篋状工具 によるケズリで磨消 (口縁部)口唇部および口縁部中央 に幅約4mmの棒状工具を用いた2 本一単位の平行沈線を横位に波状 に施工→それぞれの沈線間は篋状 工具によるケズリで磨消 (胴部)幅約4mmの棒状工具を用い た2本一単位の平行沈線を横位に 波状に施工→波状文の下位に幅約 4mmの棒状工具を用いた3本一単 位の平行沈線を縦位に垂下→それ ぞれの平行沈線間は篋状工具によ るケズリで磨消	縦方向の丁寧 なナデ	: 2.5YR4/6 : 7.5YR5/6	φ2mm以下の砂、 φ1mm以下の白色 粒子を多量、φ1 mm以下の黒色粒 子を少量含有、 やや密	
2	P136	中期後葉 加曾利 E2式	深鉢	口縁部	粘土紐を渦巻状に貼付→幅広い単 沈線で隆帯脇をおさえる	横方向の丁寧 なナデ	: 10YR6/4 : 10TR2/1	φ1mm以下の砂、 白色粒子を多量、 φ2mm以下の赤色 粒子を微量含有、 密	
3	P136	後期中葉	深鉢	口縁部	口唇に粘土紐貼付→貼付部に連続 した刻み目を巡らす	ケズリ 横方向のナデ。 口唇は篋状工 具によるケズ リで陵を作出	: 10YR5/3 : 10YR2/1	φ1mm以下の砂、 白色粒子、透明 粒子を少量含有、 密	
4	P136	後期中葉 加曾利 B式	深鉢 平縁	口縁部	口唇に粘土紐貼付→粘土紐上に連 続した指突を巡らす→無節縄文 R→幅約1.5mmの棒状工具を用い た横位の条線	口唇は篋状工 具によるケズ リ、口縁内面 は丁寧なナデ	: 10YR6/3 : 10YR6/3	φ1mm以下の砂、 白色粒子を多量、 φ1mm以下の黒色 粒子、赤色粒子 を少量含有、密	
5	P136	後期後葉 安行2式	深鉢 波状	口縁部	口縁部および微隆起帯上に単節縄 文 RL→幅約4mmの棒状工具を用 いた沈線を沿わせる	ミガキ 横方向の丁寧 なナデ	: 10YR2/1 : 10YR5/3	φ1mm以下の砂を 多量、φ1mm以下 の黒色粒子、透 明粒子を少量含 有、密	
6	P136	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	口縁部下及び、微隆起帯脇に幅約 2mmの棒状工具を用いた沈線を沿 わせる→口縁部、微隆起帯上に三 角形の刻み目を施す	ナデ 横方向の丁寧 なナデ	: 7.5YR3/2 : 7.5YR3/2	φ1mm以下の砂、 白色粒子を多量 含有、密	
7	P136	後期後葉 安行2式	深鉢 波状	口縁部	口唇に粘土粒貼付により突起を作 出→突起上に幅約3mmの棒状工具 を用いた刻み。口縁部上方に単節 縄文 RL、断面扁平の隆線を貼付 →連続する刻み→幅約4mmの棒状 工具を用いた沈線を口縁上方およ び隆線向脇に沿わせる→突起下 に貼瘤→貼瘤上に幅約3mmの棒状工 具を用いた刻み	ミガキ 口唇はミガキ。 口縁内面はナ デ	: 7.5YR3/4 : 7.5YR3/2	φ1mm以下の砂を 多量、φ1mm以下 の白色粒子、黒 色粒子を少量含 有、密	
8	P136	晩期前葉 安行3b式	深鉢	口縁部	口唇に粘土粒貼付→粘土粒上に幅 約2mmの弧状の沈線 口縁部に単節縄文 RL→幅約3mm の棒状工具を用いた沈線を横位に 巡らす	横方向の丁寧 なナデ	: 7.5YR4/4 : 10YR4/3	φ1mm以下の砂を 多量、φ1mm以下 の白色粒子、透 明粒子を少量含 有、密	
9	P136	晩期前葉 安行3式	深鉢	口縁部	口唇に幅広い粘土紐を貼付→粘土 紐上に連続した指頭押圧を巡らす →貼付下位に横位の条線を施す→ 幅約2mmの棒状工具を用いた2本一 単位の平行沈線を斜位に垂下→沈 線間の条線の磨消	横方向の丁寧 なナデ	: 7.5YR2/1 : 7.5YR3/2	φ1mm以下の砂を 多量、φ1mm以下 の白色粒子、透 明粒子を少量含 有、密	

第2表 土坑出土遺物観察表(2)

No.	遺構	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程序ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
10	P136	後期中葉 加曾利B式	深鉢	胴部	(外面)単節縄文LR (内面)半裁竹管状工具の腹面を用いた各々幅約1mmの平行沈線を横位に巡らす	;	: 5YR4/8 : 5YR2/3	φ1mm以下の砂、白色粒子を多量、φ1mm以下の黒色粒子、透明粒子を少量含有、密	
11	P136	後期後葉 安行式	深鉢	胴部	幅約1.5mmの棒状工具を用いた縦位の条線	: : ハケ状工具による不定方向のナデ	: 2.5Y3/2 : 2.5Y6/2	φ1mm以下の砂、白色粒子、黒色粒子を少量含有、密	
12	P136	晩期前葉 姥山2式	深鉢	胴部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による横位の区画、二本一組で下がる弧線文→横位区画の下に三角形の刺突列を沿わせる→区画内に幅約1mmの棒状工具を用いた細密沈線を充填	: : 丁寧なナデ : 丁寧なナデ	: 2.5Y5/3 : 2.5Y4/2	φ1mm以下の砂、白色粒子、透明粒子を多量含有、密	
13	P136	晩期前葉 姥山2式	深鉢	口縁部下半	口縁部下端に幅広の粘土紐を貼付→粘土紐上に連続した刻み目を巡らす 細密沈線を綾杉状に施す→幅約2mmのおそらく2本一単位の棒状工具を用いた平行沈線を垂下→沈線間の磨消	: : ナデ : 筒状工具による横方向の丁寧なナデ	: 10YR4/2 : 10YR3/3	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒子、黒色粒子を少量含有、密	
14	P136	晩期前葉 姥山2式	深鉢	胴部	幅約3mmの棒状工具を用いた単沈線で直線状の区画文、円圏文	: : ミガキ : 筒状工具による丁寧なナデ	: 7.5YR4/6 : 10YR4/3	φ1mm以下の砂、白色粒子、透明粒子を微量含有、密	
15	P136	晩期前葉 大洞BC式	壺	肩部	陽刻手法によるK字文風の文様	: : ミガキ : 棒状工具による横位の丁寧なナデ	: 2.5Y4/1 : 2.5Y4/1	φ1mm以下の砂、金色粒子を少量含有、密	赤色顔料塗布模倣品か
16	P136	後期後葉	深鉢	底部	単節縄文LR	: : ; : 縦方向の指ナデ	: 5YR6/6 : 5YR6/6	φ2mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒子、透明粒子を少量含有、密	底部に敷物圧痕
18	P203	後期後葉 曾谷式	深鉢	口縁部～ 胴部中半 1/4	口縁部および微隆起帯上に単節縄文RL→口縁部下および微隆起帯脇に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を沿わせ、細い縄文帯を作成→同様の沈線で胴部上半に入組弧線文、胴部下半に上向き弧線文を描く→磨消	: : 横方向のミガキ : 横方向のケズリ	: 7.5YR3/3 : 7.5YR4/2	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を少量含有、密	
19	P203	後期後葉 安行1式	台付鉢	胴部下半	幅約3mmの棒状工具を用いた弧状の条線	: : 横位の強めのナデ : 丁寧なナデ	: 5YR3/2 : 5YR4/6	φ1mm以下の赤色粒子を中量、雲母片、砂を少量含有、密	
20	P173	晩期前葉 安行3a式	深鉢 波状	口縁部	微隆起線による区画→口縁部、微隆起帯上に単節縄文RL→口縁部、微隆起帯脇に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を沿わせる→豚鼻状の貼付	: : ミガキ : 筒状工具による横方向のケズリ	: 10YR2/3 : 10YR4/3	φ1mm以下の砂、白色粒子、黒色粒子を多量含有、密	
21	P10	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→粘土紐を三角形に貼付、区画文とする→幅約8mmの幅広の単沈線で隆帯脇を押さえる	: : ; : 筒状工具による丁寧なナデ	: 10YR6/4 : 10YR3/2	φ1mm以下の砂、黒色粒子、透明粒子を多量含有、密	
22	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	口縁部と胴部の境に断面三角形の微隆起帯を1条巡らす→胴部に単節縄文LR→隆帯脇をナデにより押さえる	: : ; : 口縁部は丁寧なナデ : 筒状工具による丁寧なナデ	: 7.5YR2/2 : 7.5YR2/2	φ1mm以下の砂、白色粒子、透明粒子を多量含有、密	

第2表 土坑出土遺物観察表(3)

No.	遺構	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
23	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	胴部に単節縄文RL→口縁部と胴部の境に断面三角形の微隆起帯を1条巡らす→微隆起帯脇の丁寧なナデ	:口縁部は横方向の丁寧なナデ :横方向の丁寧なナデ	:10YR4/3 :10YR4/2	φ3mm以下の金色粒子、φ1mm以下の砂、白色粒子を多量含有、密	
24	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	口縁部下端にケズリを巡らし胴部との境に綾を作出→胴部に単節縄文RL	:口縁部は丁寧なナデ :棒状工具による不定方向の丁寧なナデ	:10YR2/1 :10YR2/1	φ1mm以下の砂、白色粒子を多量含有、密	
25	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	胴部に無節縄文R→口縁部と胴部の境に幅広の隆起帯を貼付→隆起帯上に無節縄文Rを巡らす	:口唇は丁寧なナデ :丁寧なナデ	:10YR3/3 :7.5YR4/4	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒子、透明粒子、赤色粒子を少量含む、密	
26	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	丸みのある隆起帯を連弧状に貼付し、波頂部を作出→単節縄文RL→隆起帯脇をナデにより押さえる		:7.5YR6/6 :10YR7/4	φ2mm以下の砂を多量、φ1mm以下の透明粒子、黒色粒子を少量含有、やや密	
27	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→単位不明の櫛歯状工具を用いた斜位の条線文を器面全体に施文(地文か)	:口唇は丁寧なナデ	:10YR3/2 :10YR3/2	φ2mm以下の砂、白色粒子を多量、φ1mm以下の黒色粒子を少量含有、やや密	裏面摩耗
28	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	口縁部と胴部の境に断面三角形の微隆起帯を1条巡らす→胴部に3本一単位の櫛歯状工具を用いた縦位の波状条線	:口唇は丁寧なナデ	:10YR5/3 :10YR4/3	φ2mm以下の砂、白色粒子を多量含有、密	
29	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部	胴部に単節縄文RL→口縁部下方に幅約4mmの棒状工具を用いた単沈線を横位に巡らす→口縁部と胴部の境に横位に1列の連続円形刺突を施す	:丁寧なナデ	:10YR3/3 :7.5YR5/6	φ1mm以下の砂、白色粒子、金色粒子を多量、φ1mm以下の黒色粒子を少量含有、密	
30	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	口縁部 把手	把手表面および口縁部に単節縄文RL→把手頂点に円形の窪みを作出、把手側面および裏面に円形刺突を施す	:丁寧なナデ	:10YR6/2 :10YR4/1	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の透明粒子を少量含有、密	
31	P10	後期中葉 加曾利B1式	深鉢	口縁部	(外面)単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具を用いた沈線による横帯文、弧線の向かい合わせによる単位文 (内面)幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を口縁に沿って巡らす	:ミガキ :丁寧なナデ	:7.5YR2/1 :7.5YR5/4	φ1mm以下の砂、赤色粒子、黒色粒子、透明粒子を少量含有、密	
32	P10	中期後葉 加曾利E式	深鉢	胴部	単節縄文LR	:横方向の丁寧なナデ	:10YR5/4 :10YR4/3	φ1mm以下の砂、白色粒子、透明粒子を多量、密	
33	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	胴部	8本一単位の櫛歯状工具を用いた縦位の波状・曲線状の条線	:丁寧なナデ	:7.5YR5/6 :10YR5/4	φ1mm以下の砂、白色粒子、透明粒子を多量、φ1mm以下の黒色粒子を少量含有、密	
34	P10	中期後葉 加曾利E4式	深鉢	胴部	単位不明の櫛歯条工具を用いた縦位の条線	:ナデ	:2.5YR5/6 :2.5YR5/6	φ1mm以下の砂、白色粒子を多量含有、密	
35	P10	中期後葉 加曾利E3式か	深鉢	胴部	丸みのある2本一単位の微隆起帯を渦巻状に貼付→微隆起帯区画内に単節縄文RLを充填→微隆起帯脇を幅約4mmの棒状工具による単沈線で押さえる	:丁寧なナデ	:10YR6/4 :10YR4/3	φ1mm以下の砂を多量、φ2mm以下の白色粒子、赤色粒子を少量含有、密	

第2表 土坑出土遺物観察表(4)

No.	遺構	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程度ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
36	P10	中期後葉 加曾利 E 4 式	深鉢	胴部下半	幅約3mmの棒状工具を用いた単沈線でおそらく逆U字状の文様を描出→逆U字区画内に単節縄文RLを充填	:区画外は丁寧なナデ :棒状工具による横方向の丁寧なナデ	: 5YR3/2 : 5YR2/1	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒子、透明粒子を少量、密	
37	P10	中期後葉 加曾利 E3~4式	深鉢	胴部下半	単節縄文RL→幅約5mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文→懸垂文間にはナデによる地文の磨消	: :底部付近から放射状に丁寧なナデ	: 5YR5/6 : 5YR2/1	φ1mm以下の砂、黒色粒子、赤色粒子を少量含有、密	
38	P10	中期後葉 加曾利 E 4 式	深鉢	底部～ 胴部下半	胴部前半より上位に単節縄文LR→胴部下半は丁寧なナデを施す	: :ナデ	: 5YR4/4 : 5YR2/1	φ2mm以下の砂、φ1mm以下の白色粒子、透明粒子を多量、φ1mm以下の黒色粒子を少量含有、密	
39	P10	中期後葉 加曾利 E 式	土製 円盤	1/2残存	単節縄文LR、中央に裏側からφ約11mmの穿孔	: :丁寧なナデ	: 7.5YR4/3 : 10YR3/4	φ1mm以下の白色粒子、雲母片を中量、赤色粒子、黒色粒子を少量含有、密	加曾利 E 式破片

No.	遺構	器種	石材	法量				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
17	PI36	磨石	砂岩	76 mm	84 mm	33 mm	334.3 g	欠損

回収できた炭化物は非常に少なく、合計6.8mlであった。ほとんどは同定不能な小さな木片だったが、ナデシコ科の種子が8サンプル中7サンプルから見つかっている。ただし、非炭化の種子も含まれているため、上層から混入した可能性がある。アカザ科の種子も確認できたが非炭化のものが多く、混入の可能性が高い。またオオムギやイネらしき種子も見られたが、それぞれ1点のみしか検出されていない上、前述のように非炭化の種子が伴っていることから、縄文時代に帰属するものとは断定できない。

②放射性炭素年代測定

土壌サンプル①と⑦から検出された炭化材二点を用いて、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代の測定を行うため(株)パレオ・ラボに委託した。なお、①は1号住居跡(SI01)炉の東側硬化面覆土1層より、⑦はSI01炉跡内3層より検出した試料である。

【結果】

土壌サンプル①…3050±25yr14CBP、1410-1250calBC(95.4%)

土壌サンプル⑦…2815±25yr14CBP、1040-900calBC(95.4%)

という値が算出された。両試料ともSI01から採取されたものであるが、この2点には年代範囲に開きがあった。

以下に1号住居跡(SI01)と同時期と推定される晩期前葉段階の主要な遺跡について、その年代値を挙げる。

〈安行3a式〉

- ・埼玉県東村山市下宅部遺跡：2910±50BP、2975±35BP、2935±25BP
- ・東京都町田市田端遺跡：2850±40BP
- ・千葉県流山市三輪野山遺跡：2820±40BP

〈安行3b式〉

- ・千葉県川口市下宅部遺跡：2970±20BP、2995±35BP
- ・群馬県安中市天神原遺跡：2850±35BP
- ・千葉県君津市三直貝塚：2830±35BP

これらと比較すると戸ノ内貝塚SI01において測定された年代値は晩期前葉段階の妥当な数値を示していると考えられ、本住居跡は該期に帰属する遺構であることが窺える。

### ③ 1号住居跡(SI01)内の柱穴・ピットについて

本住居跡からは多数のピットが検出されているが、住居プラン内に収まるその全てが住居に伴うかどうかの判断は難しい。

まず溝状遺構の底面で確認されたピット(P30～P56)について見てみよう。これらはおおよそ弧状に配列しており住居の推定プランを想定させるが、その大半は溝状遺構によって破壊されている。そのため残存部分はほとんどなく、発掘調査段階においてもその検出には困難をきわめた。しかしながら小片ではあるものの遺物が出土しているピットは多数あり、そのうちP41やP52は後・晩期の土器と考えられる土器が出土している。住居床面と溝状遺構底面との比高差は約40cm程度あるが、これらのピットが本来は住居跡に伴う遺構、すなわち壁柱穴として機能していたと捉えることは可能である。

次に、住居床面のレベルで確認されたピット(P1～29)を検討する。P3やP6は住居壁の南西部を一部切っている。特にP6は径60cmを測り、他の壁柱穴と同一の機能を持っていたと考えるのは難しい。またP1やP2のように深さが1mを超える非常に深いピットが偏在するが、これらについても住居に直接伴っていたかどうかは不明である。以上のことを解釈するうえで、住居南西側に密集したピット群の存在を考慮する必要がある。第4次調査の終盤、C-1i・jグリッドを中心に焼土の散布とともに多数のピット群が確認された。時間上の制約とピット群が第2次調査区に広がる可能性も考えられたため、それら全てを調査・把握することはできず、今回の報告では図示することができなかった。しかし、これらのピット群が住居とは別の遺構を形成していた可能性も十分に想定される。とは言え、詳細については次年度の第5次調査に持ち越されることとなり、上述したP1・P2・P3・P6なども今後はそれらとの関係の中で位置づけていくべきで

あろう。

#### ④印旛沼周辺の事例

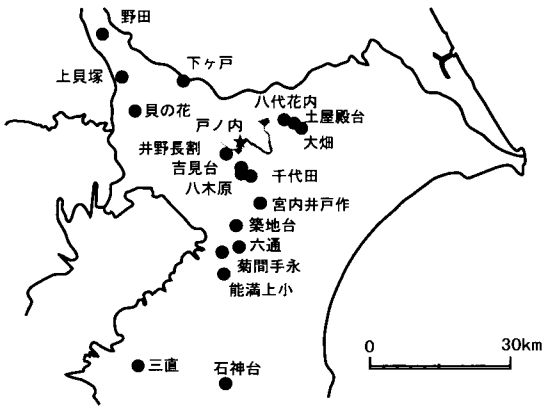
これまで見てきたように、戸ノ内貝塚1号住居跡（SI01）は平面プラン楕円形を呈し、明瞭な主柱穴を持たない。おそらく壁柱穴を中心としてその上屋構造を支えていたと推測される。またほぼ半分が破壊されていることもあり、出入口施設は現状では確認できなかった。これらを踏まえたうえで、印旛沼周辺における他遺跡の住居跡事例を概観する。(財)印旛郡市文化財センターによると印旛沼周辺において晩期の竪穴住居址が確認されている遺跡は11遺跡あり（図10）、印旛沼を境に沼以北と沼以南それぞれについて順に触れる。

##### 【印旛沼以北】

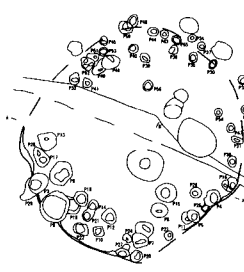
八代花内遺跡、大畑遺跡、戸ノ内貝塚などがある。形態が把握できる住居跡資料は戸ノ内貝塚を含め5軒確認できた。これらの住居プランは八代花内006号住居跡を除くと円形プランの範疇に収まる。また明瞭な主柱穴を確認できる例はほとんどない。唯一、八代花内015号には深さのある柱穴が四角形に規則的に配置する。その他の住居には多数の柱穴が不規則に配するものがほとんどである。後述する印旛沼以南の住居跡の事例と比較して最も対照的なことは、出入口施設を持つ確実な事例が1軒もないことである。大畑6号住居跡は住居壁北側に楕円形のピットが対になって存在している。報告者によると本来は柄鏡形の住居であった可能性があると指摘しているが、別の遺構に切られているため断定できるものではない。

##### 【印旛沼以南】

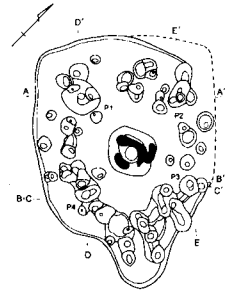
吉見台遺跡、宮内井戸作遺跡、千代田V遺跡などがある。住居形態が把握できるものは4軒あった。住居プランは出入口と想定される張出し部を除くと、ほとんどが円形に属する。方形の掘り込みを持つと推定される宮内井戸作Ⅱ-2地区21号住居跡については、壁柱穴は円形に配列している。明瞭な主柱穴を持つ事例は千代田V 2号住居跡を除き3軒ある。それらの柱穴の径・深さはともに大きく、千代田V 3号住居跡や宮内井戸作の例は4本の主柱穴間の距離がほぼ等しく規則的な配置を持つことが分かる。吉見台6号住居跡に関しては、報告者によると炉などの主要施設を中心線上に配し、それを軸として主柱穴の配置が対象となるよう設計されているとされ、「吉見台建築様式」を提唱している。この住居跡に関しては今回集成した事例の中では規模が突出しており、大型住居跡の可能性があり、次に出入口施設であるが、千代田2号住居跡を除き、すなわち主柱穴を持つ先述した3軒の住居跡に付属されている。しかし、その形態は一様ではなくピットを伴わず住居プランのみが張り出すものや、複数のピットによって形成されているものなどがある。



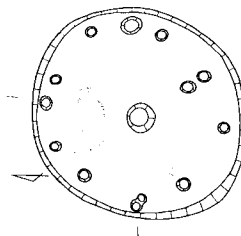
千葉県における晩期の主要遺跡



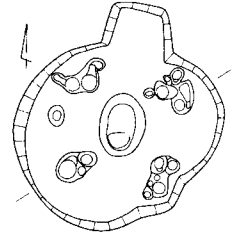
戸ノ内 SI01



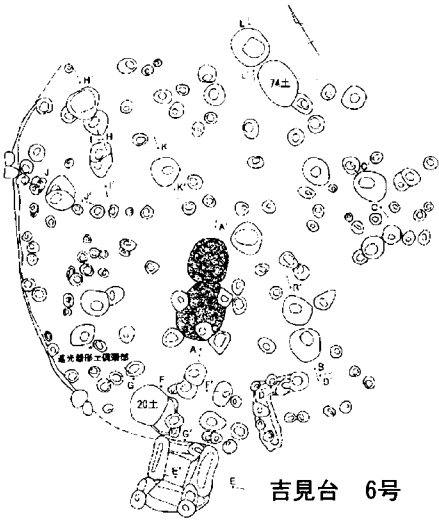
宮内井戸作 II-2地区21号



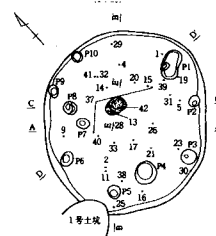
千代田 V 2号



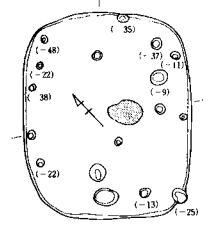
千代田 V 3号



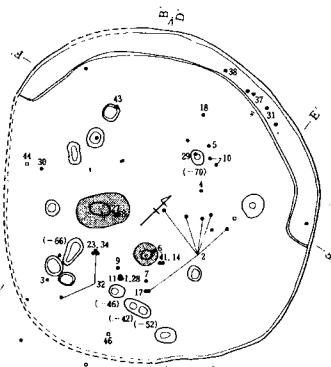
吉見台 6号



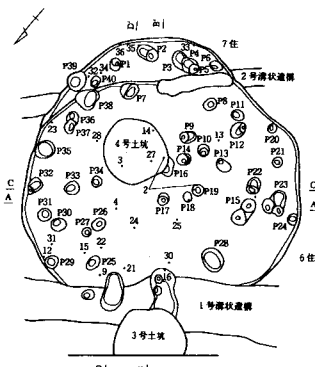
大畑 3号



八代花内 006号



八代花内 015号



大畑 6号



第10図 印旛沼周辺の縄文時代後・晩期の竪穴住居跡



### ⑤晩期の竪穴住居跡の様相

現在でも資料数が未だ少ない当該地域ではあるが、ここで印旛沼周辺における晩期の竪穴住居の様相をまとめてみたい。

まず、住居プランは円形に属するものが多い。方形と考えられるものもいくつか存在するが、それらにしても隅丸方形を呈するもので、例えば千葉県の中央に位置する菊間手永遺跡や祇園原貝塚で確認されているような隅の角張った方形プランの住居とは同一と判断するのは難しい。柱穴配置に関しては印旛沼の以北と以南で差が見られた。以南では比較的明瞭な支柱穴を持つ傾向にあり、支柱穴数は4本が多い。一方で印旛沼以北では、柱穴の深さが一定でなかったり配列が不規則である。柱穴と考えられるピットは多数検出されているものの、まばらに散在している印象を受ける。それに伴って支柱穴構造を持つ住居跡には、出入り口施設が付属される事例が多いことが看取される。少なくとも、確実に出入り口施設を持ちながら柱穴配置が不規則な住居は、印旛沼の以北・以南ともに1軒もなかった。このように、支柱穴構造と出入り口施設が密接な関係を持っている可能性は高く、今後は印旛沼周辺だけでなく千葉県全域を通してこの二つの属性の関係について考えていく必要があるだろう。

次に視点をより南、千葉県の中央地域に向けてみる。この地域には先ほども取り上げたような菊間手永遺跡や祇園原貝塚の他にも、築地台貝塚や能満上小貝塚などの著名な縄文時代後・晩期の遺跡群が密集する。これらの遺跡では支柱穴や出入り口施設を持つものが多く、これまでの住居研究で取り上げられてきた（米田1980、菅谷1985・1990、阿部1995）ように「住居型式」と捉えうるような定型的な構造を持つ。翻って印旛沼以南の住居事例を考えると、これらは地理的にも近接する地域であることから千葉県中央地域の影響が強かったのではなかろうか。それゆえ支柱穴や出入り口施設を持つものが多いのである。逆に戸ノ内貝塚を含めた印旛沼以北では、それらとは若干異なった様相を呈している。印旛沼以南地域の住居跡を支柱穴と出入り口施設を持った定型的な住居群とすると、印旛沼以北地域はそれらを持たない不定型な住居群と見なすことができる。戸ノ内貝塚第4次調査で確認されたSI01は、これまでの住居跡事例から推測される以上のような様相を呈した印旛沼以北において、その範疇で捉え得る新たな資料となるであろう。

（根兵皇平）

### おわりに

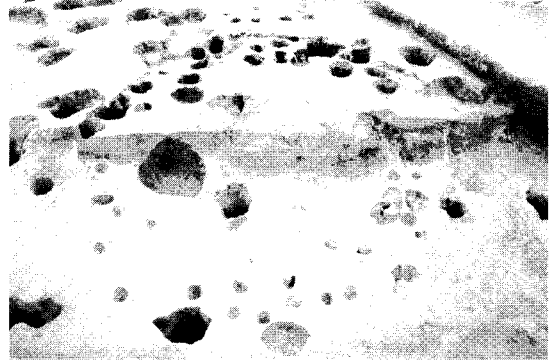
今年度の発掘調査により、縄文後・晩期に属する竪穴住居跡が確認された。残念ながら後世の古墳時代の周溝によって、半ばを寸断されたが、しかし、かつての規模と形状を推測することができた。楕円形ないしは円形のプランが推測される。しかし、これが確定するまでには更なる調査が必要である。

現状で戸ノ内貝塚例に対比出来るのは、千葉県事例のうち数例に過ぎないであろう。本稿では





P203 遺物出土状況（南から）



1号住居跡（S101）全景（北西から）



第4次調査区全景（西から）



調査風景